

日本出版クラブ「洋書の森」主催
翻訳者のためのウィークエンド スキルアップ講座 第30回

宮脇教室6限目

「表現を訳す」

講師 宮脇孝雄 氏



ちょっと翻訳をやったことのある人なら気がついていると思いますが、外国語が読めることと翻訳ができることは別の問題です。もちろん、外国語が読めなければ翻訳はできませんが、読めるならできるかという、必ずしもそうではない。

なぜかという、翻訳は言葉を訳すだけの作業ではないからです。言葉を訳すだけでなく、もう一步踏み込んで、外国語の〈表現〉を日本語の〈表現〉に置き換えること——つまり〈表現〉を訳すことが、翻訳という作業を行なう際に一番大事なことなのです。

残念ながら、翻訳を始めたばかりのころは、言葉を訳すのに精一杯で、表現を訳すことまで頭が回らないのが普通です。いいかえれば、その余裕が出てくれば、初心者域を抜けて、次のステップに進めるのです。

宮脇孝雄

◆ 参加要項 ◆

日 時

2018年2月10日（土） 15：00～17：00（受付開始14：30）

講 師

宮 脇 孝 雄 氏（翻訳家／随筆家）

会 場

日本出版クラブ会館・セミナールーム
（新宿区袋町6番地 都営大江戸線牛込神楽坂駅より徒歩2分）
<http://www.shuppan-club.jp/>

参加費

講座 2,200円（資料代を含む）

定 員

80名（申込順、定員になり次第締切らせていただきます）
「洋書の森」未会員の皆さまもご参加になれます
希望者による恒例の交流会（参加費3200円・食事代を含む）を講師同席のもと17：30より、
会場1Fレストラン・ローズルームにて開催いたします
参加ご希望の方は同時にお申込みください

お申込み・お問合せ

お名前・洋書の森会員番号（会員の方）・ご連絡先電話番号、アドレス・参加人数を明記して“2/10(講座のみ or 講座・交流会とも)参加希望”と以下アドレス宛てにE-mailにて送信してください

(財)日本出版クラブ内 「洋書の森」事務局
E-Mail : yousho@shuppan-club.jp TEL 03(3260)5271

◆講義内容と課題文◆

今回は、英語の小説表現を日本語に置き換える練習をしてみたいと思います。

何よりもまず実践ということで、次の英文の最初のパラグラフを訳してみてください。

これはG・K・チェスタトンのThe Invisible Man（「透明人間」）という短篇の一節です。有名なブラウン神父シリーズの一篇ですので、翻訳は何種類も出ています。現在、新刊書店で入手可能なものでも三種類*ありますので、あらかじめどれかを読んで、内容をつかんでおくことをお奨めします（既訳が正解とは限らない、というのも厳しい現実です）。そのあと、既成の訳文は頭から追い払って、自分の文章で訳してみてください。

ヒロインが語る身の上話です。地の文ではなく、すべて会話の文だと思ってください。

*ちくま文庫（『ブラウン神父の無心』）、ハヤカワ文庫（『ブラウン神父の無垢なる事件簿』）、創元推理文庫（『ブラウン神父の童心』）。創元版では「見えない男」という題になっています。

"Ludbury is a sleepy, grassy little hole in the Eastern Counties, and the only kind of people who ever came to the 'Red Fish' were occasional commercial travellers, and for the rest, the most awful people you can see, only you've never seen them. I mean little, loungy men, who had just enough to live on and had nothing to do but lean about in bar-rooms and bet on horses, in bad clothes that were just too good for them. Even these wretched young rotters were not very common at our house; but there were two of them that were a lot too common--common in every sort of way. They both lived on money of their own, and were wearisomely idle and over-dressed. But yet I was a bit sorry for them, because I half believe they slunk into our little empty bar because each of them had a slight deformity; the sort of thing that some yokels laugh at. It wasn't exactly a deformity either; it was more an oddity. One of them was a surprisingly small man, something like a dwarf, or at least like a jockey. He was not at all jockeyish to look at, though; he had a round black head and a well-trimmed black beard, bright eyes like a bird's; he jingled money in his pockets; he jangled a great gold watch chain; and he never turned up except dressed just too much like a gentleman to be one. He was no fool though, though a futile idler; he was curiously clever at all kinds of things that couldn't be the slightest use; a sort of impromptu conjuring; making fifteen matches set fire to each other like a regular firework; or cutting a banana or some such thing into a dancing doll. His name was Isidore Smythe; and I can see him still, with his little dark face, just coming up to the counter, making a jumping kangaroo out of five cigars. ← ここまでが範囲です。

"The other fellow was more silent and more ordinary; but somehow he alarmed me much more than poor little Smythe. He was very tall and slight, and light-haired; his nose had a high bridge, and he might almost have been handsome in a spectral sort of way; but he had one of the most appalling squints I have ever seen or heard of. When he looked straight at you, you didn't know where you were yourself, let alone what he was looking at. I fancy this sort of disfigurement embittered the poor chap a little; for while Smythe was ready to show off his monkey tricks anywhere, James Welkin (that was the squinting man's name) never did anything except soak in our bar parlour, and go for great walks by himself in the flat, grey country all round. All the same, I think Smythe, too, was a little sensitive about being so small, though he carried it off more smartly. And so it was that I was really puzzled, as well as startled, and very sorry, when they both offered to marry me in the same week.

訳文の添削を希望される方は、2月2日（金）15:00までに「洋書の森」事務局へ届くようにメールでお送りください。いつものように添削答案は氏名を消し、疑問の残る箇所には傍点を引いて当日の講義時間に配布いたします。「たいへんよくできました」を目指してがんばってください。

◆講師略歴◆

宮脇孝雄（みやわき たかお）

1954年2月14日、高知県土佐市生まれ。高知県は東京都より面積が広いが、人口は杉並区より少なく、しかもその八割が高知市に集中しているため、県庁所在地を少し離れると一キロ四方自分以外誰もいないという場所がよくあり、少年時代から人間ではなく昆虫や鳥や魚と戯れることを好んだ。実家の右隣はお菓子屋、左隣は本屋で、字が読めるようになるとお菓子を食べながら本を読む生活を満喫するようになる。実家は映画館経営で、本を読んでいないときは映画館に入り浸る小学生だった。大学時代に参加した推理小説サークル（ワセダミステリクラブ、略称WMC）の先輩、大井良純氏（翻訳家、故人）に小鷹信光氏（作家、翻訳家、故人）と菅野園彦氏（早川書房編集者のちに編集長、故人）を紹介していただいて、この道に入る。もともとはSFファンだったが、WMCで折原一氏（のちの作家）から古本屋巡りの手ほどきを受けたり、入れ違いに卒業したM氏（のちの作家、北村薫氏）が部室に残していったエラリー・クイーンや鮎川哲也を読むうちにミステリに目覚める。大学二年のとき「ミステリ マガジン」に短篇を訳したときにもらったのが最初の原稿料、その四年後に単行本（早川ポケミス、ジョイス・ポーター著『殺人つきバック旅行』）を出してもらったときに振り込まれたのが最初の印税。以後、四十年ほど売文生活を送る。

主な著書

『書齋の旅人ーイギリス・ミステリ歴史散歩』（1991年）早川書房、『書齋の料理人ー翻訳家はキッチンで…』（1991年）世界文化社、『煮たり焼いたり炒めたり』早川文庫（1998年）、『翻訳家の書齋ー〈想像力〉が働く仕事場』（1997年）研究社、『ペーパーバック探訪ー英米文化のエッセンス』（1998年）アルク、『翻訳の基本ー原文どおりに日本語に』（2000年）研究社、『続・翻訳の基本』（2010年）研究社、『英和翻訳基本辞典』（2013年）研究社。

主な訳書

トーマス・トンプスン 『血と金 ある富豪の愛と執念』 小鷹信光共訳、パシフィカ、1977年、ジョイス・ポーター 『殺人つきバック旅行』 早川書房、1978年、リチャード・スターク 『悪党パーカー 殺戮の月』 早川書房、1979年、コリン・ウィルコックス、ビル・プロンジーニ 『依頼人は三度襲われる』 文藝春秋〈文春文庫〉、1979年、リチャード・エイヴァリー 『タンタロスの輪 コンコラッド消耗部隊』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1980年、ウィルコックス 『容疑者は雨に消える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、ウィルコックス 『女友達は影に怯える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、テランス・ディックス 『盗ま

れた名画をさがせ』 ティビーエス・ブリタニカ(ベーカー街少年探偵団)、1981年、M.S. バリー 『サイモンと魔女』 ティビーエス・ブリタニカ、1981年、グレゴリー・ベンフォード、ゴードン・エクランド 『もし星が神ならば』 早川書房のち文庫、1981年、ウィリアム・ディール 『シャーキーズ・マシーン』 角川書店、1982年、テリー・カー 『聖堂都市サーク』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1984年、ジェイムズ・マクルーア 『小さな警官』 早川書房、1984年、アーサー・ライアンズ 『ハード・トレード』 河出書房新社 のち文庫、1985年、W・ケリー、E・W・ウォーレス 『目撃者 刑事ジョン・ブック』 角川書店〈角川文庫〉、1985年、クライヴ・バーカー 『ミッドナイト・ミートトレイン』 集英社〈集英社文庫〉、1987年、ジョン・コーンウェル 『地に戻る者ーイギリス田園殺人事件』 早川書房、1988年、フリーマントル 『名門ホテル乗っ取り工作』 新潮社〈新潮文庫〉、1989年、パトリック・マグラア 『血のささやき、水つつぶやき』 河出書房新社、1989年、ジェーン・デンティンガー 『そして殺人の幕が上がる』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1991年、ヨゼフ・シュクヴォレツキー 『ノックス師に捧げる10の犯罪』 宮脇裕子共訳、早川書房、1991年、ディーン・R・クーンツ 『ストレンジャーズ』 文藝春秋〈文春文庫〉、1991年、デンティンガー 『誰も批評家を愛せない』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1992年、パトリシア・ハイスミス 『女嫌いのための小品集』 河出書房新社〈河出文庫〉、1993年、イアン・マキューアン 『イノセント』 早川書房 のち文庫、1993年、ジェフ・ニコルソン 『食物連鎖』 早川書房、1995年、ジョン・ダニング 『死の蔵書』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1996年、C・W・ニコル 『スケッチの音』 エム・ピー・シー、1999年、メアリー・M. モーリス 『逃避行』 集英社〈集英社文庫〉、1999年、ウィリアム・J. パーマー 『文豪ディケンズと倒錯の館』 新潮社〈新潮文庫〉、2001年、ドロシー・L・セイヤーズ 『顔のない男ーピーター卿の事件簿〈2〉』 東京創元社〈創元推理文庫〉、2001年、グラディス・ミッチェル 『ソルトマーシュの殺人』 国書刊行会、2002年、ハイスミス 『回転する世界の静止点ー初期短篇集1938-1949』 河出書房新社、2005年、ハイスミス 『目には見えない何かー中後期短篇集1952-1982』 河出書房新社、2005年、マシュー・ニール 『英国紳士、エデンへ行く』 早川書房、2007年、『ジーン・ウルフの記念日の本』国書刊行会、2015年。